みんぱく インタビュー

開館三〇周年、そしてこれから(1)

民博は三月いっぱいまで、一年三ヵ月にわたって開館三〇周年記念事業を繰り広げてきました。今月号では、この事業を踏まえ、今後どのように継承発展させていけばよいか、松園万亀雄館長をはじめ、事務的に支えてきた管理部総務課総務係の中原栄作さんに、編集長がお話を伺いました。

記念式典 2007年11月14日

記念式典後の特別展「オセアニア大航海展」を見学される秋篠宮同妃両殿下
2007年11月14日

養老孟司氏との館長対談。司会は坪倉善彦氏
2007年11月18日

みんぱく インタビュー

松園 万亀雄館長に聞く

三〇年間の変化 世界の変化と民博の研究

―この三〇年の変化についてまずお考えを聞かせてください。

民博は教員の研究の中身と展示方法の両面で変化し、それは近年になるほど激しいと思います。研究は主として教員個人の意志でやるので、スムーズな変化をしていると思いますが、展示は基本的コンセプトと物理的な側面もあるし、民博全体の意志を統一しないといけないので、研究ほどには変化が早くない、という印象はもっておりますね。

開館したのは、途上国とよばれる国々が独立して十数年から二〇年のころなので、いわゆる伝統的な要素が色濃く残っていました。ですから、民博創設以前から日本にあった旧植民地時代のモノも含め、変化が緩慢な時代のモノを収集して、それで民博はスタートしたんだろうと思いますね。その後、世界の状況が変わって行って、一九八〇年代からグローバル化ということばが使われ始め、文化人類学の分野でも一九八〇年代後半からグローバライゼーションということばを使った本や論文がたくさん出るようになりました。

こうした動きに合わせて、多文化的な要素を研究する人達が増えてきました。途上国の調査をするにしても、～族の文化というような固定化された文化の概念があてはめにくくなってきているし、同じ国のなかでも都会と地方のあいだで移動と文化の交流があったりする。実際、都会に出て住んでいる人でも、地方を気にして儀礼に参加する人、地方に送金する人、地方に家を建てる人、地方で老後の人生を送る人などさまざまなケースが生まれているし、地方同士の交流も増えている。よその国との関係も強まり、さまざまな援助や干渉が増えているし、ジェンダーの平等、公平など、ユニバーサルと思われている考え方が広まりつつあり、現地社会も外圧で変わってきています。憲法や法律にも、男女平等をうたうなど変化しつつある。教員の個々の研究では、こうしたグローバライゼーションの最先端の様相を踏まえた研究がたくさん出てきています。

長い目で変化を見る視点も

例えばITなどを使って世界中の人びとの考えに均一的な要素が出てきているのは事実ですが、一方で伝統的な生活を送っている人びとがいることも忘れてはならない。先端的な様相だけに目を奪われてはならないと思います。

三〇年前には、人類全体の歴史を考える研究者がたくさんいましたね。霊長類の一員としてのヒトが形質的にどのように進化してきたかを研究する人や、採集狩猟民、牧畜民とかを時間軸のうえに並べて進化論的に、つまり、長い時間幅で人類の社会変化を考える研究者が多くいた。でも、現在のようにグローバライゼーションが進むと、変化の最先端に目を向ける研究者が増えてきたことと裏腹に、人類史を長い時間幅で見る研究者が少なくなってきたと思います。これはあまりよろしくない現象だと思いますね。両方の研究が必要なのに、と思います。そのあたりを民博の今後の研究でも進めて欲しいと思っています。

現在、民博の機関研究という枠組みは、「社会と文化の多元性」「人類学的歴史認識」「文化人類学の社会的活用」「新しい

学術講演会「毎日新聞夕刊連載コラム『異文化を学ぶ』をもっと学ぼう！日本で暮らす－移民の知恵と活力」
2007年3月2日、毎日新聞オーバルホール

国立民族学博物館開館30周年・
東京大学創立130周年記念フォーラム
「文化資源という思想：21世紀の知・文化・社会」
2007年11月24日

人類科学の創造」という四つの領域で研究を進めていますが、これは今言った意味で良い組み合わせだと思っています。例えば「文化人類学の社会的活用」は、変化の最先端を研究している。特に、開発援助などを含めて、近年起こった、外国からの援助によって現地社会がどう変わったかを追う研究は、一〇～二〇年間など比較的短い時間幅で地域を見ている。それに比べて、他の三つの課題では比較的長い時間幅をあつかっている。つまり、全体として時間幅の短いものと長いものがうまく組み合わせられていると思います。でもやはり、最近の激しい社会変化につい目がいくので、変化の最先端に関する研究が多くなっています。

特別展「オセアニア大航海展
―ヴァカ モアナ、海の人類大移動」
開幕式典　2007年9月13日

映像をたくさん用いた特別展「聖地★巡礼－自分探しの旅へ」の
開幕式典　2007年3月14日

モノの変化に対応した展示

展示の変化に関して言うと、開館当時に集められたモノは、それぞれの土地で産出される素材を使った作られたモノであり、土地柄、社会・文化が特色あるかたちであらわれている。しかしこの三〇年のあいだに、輸入された素材が使われるようになり、画一化とまではいかないが、素材の点で見ると似たようなモノが世界に広がっていった。それだけでなく、文化的交流により、それまでの固定化された文化財的なモノが、外部の影響を受けて、デザインが変わる、色合いが複雑になる、など変化してきました。

―文化アイデンティティ表象のために、民族芸術などは外部の人に使ってもらうことを前提に作られている例が増えています。

観光客に買ってもらうモノは、産業化が進んで事業として拡大しているのは事実です。観光土産というのは、売れるための要望に合わせて作るので、在来的な要素と外来的な要素が混じったものとなります。研究対象として面白い現象ですね。

そこで、民博の展示を考える場合、モノの展示だけでなく、そうしたモノが産出された経済・社会状況の変化を知ってもらう必要があり、その手段としては映像が効果的だと思いますね。現在の民博で映像を使う手段には、ビデオテークや電子ガイドがありますが、展示とやや切り離された感があります。今後は、展示自体に映像をもち込む例が増えるだろうと予想しています。大森康宏さんが実行委員長をされた特別展「聖地★巡礼」は、映像そのものが展示になっていましたが、あれほどでなくても、映像を取り入れる展示が増えるでしょう。

民博の研究をアピールする機会としての記念事業

わたしは館長になる五年前までは外部から民博を見ておりました。さまざまな学会の要望が実現し、優秀な研究者達が集められて民博が創設されたわけですから、一九七四年の創設当初は、日本における文化人類学・民族学の中心センターとしての熱意が大きかった。しかし一〇年、二〇年経つうち、関西にある一研究機関と見られるようになってきた、と外部からは見ていました。共同利用機関として作られたのに、充分その機能を果たしてきたんだろうかと思っておりました。ですから、館長になってから、共同利用性を高めるために、民博以外の研究者にも民博の研究資源をもっと使ってもらえるよう努力してきたつもりです。共同研究でも外部の代表者によるもの、展示でも、共同利用スペースを作って民博と協力して展示を作るもの、などができればよいと思っておりました。

ちょうどそんなときに開館三〇周年を迎えたので、記念事業では、大阪に文化人類学のセンターがあることを全国にアピールする機会となるように努力しましたし、その効果はあったと思います。一〇周年、二〇周年に比べて三〇周年は重みがあるので、マスコミで取り上げられる機会も多く、広報関連の活動が質・量ともに盛んで、この三〇年のあいだでもっとも広報活動が盛んな年になったと思います。外部の広報関係者の協力や、五〇数名の教員がいろいろな局面で参加してくれました。総力あげて、ということばにふさわしい活動ができたと思います。

館長の「ウィークエンド・サロン」
ではケニア紅茶がふるまわれた
2007年11月11日

これまでの外部へのアピールは展示が中心だったためか、入館者や市民は、本館四階に研究者がたくさん居ることを知らない。そこで、展示だけでなく、研究者のことを取材して欲しいとマスコミにも訴えたり、意図的に研究面での広報に力を入れてきました。民博内外での公開講演会、映画会、研究公演も、この数年間ではいちばん多く開催したと思います。

例えば入館者との接点としての「ウィークエンド・サロン」では、五〇数名の教員に加えて名誉教授たちがいろいろな研究をしていることを多くの方々に知ってもらう良い機会となり、平均して三〇ないし四〇名の参加があったと聞いています。わたしの場合には、終わってからケニア紅茶を飲んでもらったりしました、質問も多かったし。また、教員の側からも、自分の研究について語る機会があって良かったという意見が多かったようです。この事業と、企画展「世界を集める」が、特筆すべき教員全員参加の事業でした。総掛かりで参加したという意識は、教員の皆さんも思ってくれているのではないでしょうか。教員だけでなく、事務系職員たちも多くの部署で横断的によく協力してくれたと、わたしはありがたく思っています。

研究を市民にアピールするには

公開講演会、映画会の解説など、主として語りをとおして自分の研究を紹介する場合には、専門用語を使わないでわかりやすく研究の中味を伝えないといけない。民博は研究出版を出す仕組みを既にもっていますが、一般の方々が時間をかけずに読め、文化人類学を知ってもらう仕組みが必要です。一番いいのは、民博が出版局をもつことでしょうが、単独で出版局をもつのは難しいので、出版社とタイアップするなどの方法を考えればよいと思っています。

―確かに、学術出版は数百人の目にしか触れないかも知れない、ところが一般書となると何千、何万の人びとに広がる可能性がある。そのためには、教員側も、書き方、用語、論理の立て方、いろいろなところで工夫が必要ですが、出版社、編集者の協力があれば教員の鍛錬の場ができますね。

そうです、次の館長には、そのあたりを考えてもらいたいですね。

今後のさらなる展開を

―館長は、法人化、創設三〇周年、開館三〇周年など、大変な時期に着任されたのですね。

先ほどもいいましたが、共同利用機関として外部との共同利用性を高めることを考えてきました。また、教員たちが、それぞれの個人的努力でやってきた研究や社会連携活動を、館全体の活動に位置づけて、民博の出版物やウェブサイトでも広報するようにしてきました。これによって館全体の活動が盛んになったのは、それまでとは異なる点で、個々の教員、機関としての民博の双方にとって相乗効果があがったのではないでしょうか。もちろん、法人化に伴って館の活動をアピールする必要が生じたこともありますが、そのことをプラスにとらえたわけです。こうしたことは館長として心がけてきた点ですが、わたしがトップダウン的に進めるのではなく、教員の皆さんがそういう気になってもらうようにしてきたつもりです。

研究公演「ギニアからの熱い風－今を生きるアフリカの
伝統音楽と踊り」2007年7月14日

また、二〇〇四年（平成一六年）の創設三〇周年の際に作った『国立民族学博物館三十年史』（平成一八年三月三一日発行）は、非常に良い仕事だったと思っています。日本の文化人類学の歴史や、民博の歴史を語る場合の重要な参考資料になる

みんぱく インタビュー

管理部総務課総務係の 中原 栄作さんに聞く

と思います。あの本の良いところは、二〇年間を要約し、その後の一〇年間を詳しく記述してある点で、さすがに歴史学者である塚田誠之さんが委員長としてとりまとめた仕事だったと思いますね。

開館三〇周年では、入館者数が増加しており、これを続けないといけない。そのために重要なことのひとつは、今後どのような特別展を開くかですね。専門的な関心のある人だけでなく、一般の人びとにも興味をもって研究成果を見てもらうには、もう少し工夫の余地があると思います。さきほどの出版の話と同じで、わかりやすい表現になるように研究者をサポートする仕組みが必要でしょう。MMPの意欲を取り込む仕組みも考えてはどうかと思っています。

共同利用性を高めるという点では、研究に比べて展示は立ち後れている印象です。例えば、共同研究の審査には外部委員が加わりますが、展示企画を審査する会議に外部委員は入っていません。もっとも展示はお金がかかるし、館の意向や事務処理とのすり合わせに手間と時間がかかるので、共同研究のように簡単に外部に開く訳にはいかない、ということも良くわかっています。

—今後もっと展開すればよいものには何が考えられますか?

映画会、海外からの演者による研究公演などは非常に人気が高く、外部にアピールする企画ですので、法人化のときには有料化の可能性も考えてみました。でも、収益としてみればごくわずかですので、むしろ無料のままの方がサービスの点で良いと思っています。

また、博学連携はもっと進めたら良いですが、さらに、シルバー世代を開拓する努力があっても良いでしょう。学校団体については「事前見学&ガイダンス」をやっていますが、老人クラブでもできないか。老人クラブというのは全国組織で各地に支部がある、学校のようにかっちりした組織なので、働きかけをする余地は非常にあると思います。

—元気の良い団塊世代が増えてきていますしね。

民博のさまざまな催しものに年配のリピーターが多いので、その方々と連携することを大いにやるべきだと思うし、必ず効果が上がると思っております。民博は吹田市と協定を結んでいるので、老人クラブの担当部署に仲介してもらって、市内の老人クラブに連絡する、情報を流す、それぞれの集会場があるのでポスターを貼る、修学旅行のように民博に来てもらう、などの方策も考えられます。未開拓の分野ですので、誰かやってくれないかと思います。

また、民博モニター制度を導入するアイデアもあります。例えば、チラシの駅貼りやポスターを配る、新しいものに差し替えるなどの広報活動を支援する組織を各地に作ってはどうか、と思っています。

わたしも民博に来てから、それぞれに才能のある多彩な人達の居ることがわかってきました。人間文化研究機構のなかでも、いろいろな意味で先進的だと思います。これを生かした更なる発展を望んでいます。

—三〇年を踏まえた展望をお話いただき、ありがとうございました。

—中原さんは最初から三〇周年記念事業の事務的な中心としてかかわってこられましたね?

館長は、二〇〇六年度中に委員会を作って、二〇〇七年の初めから事業を始めようと考えておられました。組織としては、開館三〇周年記念事業推進委員会、その下に開館三〇周年記念事業推進企画実施部会を置く。それらの事務は総務課が担当する、という仕組みで進めるという原案に基づき、委員会規則を制定しました。推進委員会は田村克己副館長のもと二〇〇六年九月に始まり、事業の方針として、開館三〇周年を記念し、民博や広く文化人類学・民族学の関連研究分野の展望を見据えた構想を含む事業として実施するものとするという理念のもと、記念事業は、記念式典および記念事業推進上必要な事業とし、従来からの定期事業については、記念事業としての内容の充実を図り、実施することを原則とすることとしました。そして、推進企画実施部会は小林繁樹部会長のもと一〇月から活動を始めました。そこでは、中心となる事業としての記念式典、館長対談のほかに、ボトムアップ的に新しい企画を考えることになり、館員全員からアンケートによって提案を求め、そのなかから実施可能なものを検討していくことになりました。その他に、定例的におこなっていた学術講演会、シンポジウム、特別展、企画展、みんぱくゼミナール、映画会、研究公演などについても展望を見据えた企画をたてていただき、記念事業として位置づけることとして、さまざまな事業を進めたわけです。

その結果、二〇〇七年一月から二〇〇八年三月までのあいだに、五〇の事業、「みんぱくゼミナール」、「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」のそれぞれの回もカウントしますと一二六の事業をしたことになります。これは、一〇周年、二〇周年の際に比べると二倍、三倍の規模ですから、入館者数の増加にも寄与したと思います。多くの事業をおこなったので、メディア取材も多かったし、広報企画室も積極的にメディアに働きかけて、テレビの特別番組も組まれましたし、ラジオ番組を開拓したりしました。

記念式典は、開館記念日である一一月一七日の週におこないました。秋篠宮同妃両殿下には、この式典のご臨席のためだけにご来阪していただけましたし、両殿下にお褒めいただき、また、参加者にも好評で、無事実施できました。

一一月一八日に開催した館長対談では、解剖学者の養老孟司氏を迎え、四五〇席の講堂が満席となり大盛況でした。

新しい事業の企画としては、アンケートの結果から取り上げましたが、実現の可能性については、提案者に加えて、関連する教員と担当部署に広げたワーキング・グループを立ち上げて検討をお願いし、そこでいくつかの提案を合体させるなどの工夫もしました。「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」はまさにそのパターンでした。

これは、土日・祝休日にもかかわらず、総研大の院生や担当部署の職員のサポートを受けて実施できました。平均参加者は三〇〜四〇名、このくらいの数字だからこそ、気さくな話ができ、質疑応答も盛んで、ざっくばらんな交流をおこないました。入館者、研究者の双方に好評だったのは、担当課としても嬉しい事業となりました。そこで、今後も継続実施していくことになり、広報企画会議のもとにある広報事業専門部会で具体策が検討されています。

他にも新しいかたちでおこなった事業としては、オーストラリア学会、古代アメリカ学会を開館三〇周年記念事業として開催しました。また、開館記念日に合わせて、館内の六ヵ所で二四〇日前からおこなった「カウントダウン・カレンダー」も、館員の意識が高まり、入館者の期待も高まる効果があったのではないかと思います。

—反省点はありますか?

そうですね、市民参加型事業はたくさんありましたが、市民に具体的に何かを募るような事業、例えば、一〇周年のときにおこなった、写真コンテスト・写真展「世界の民族—その暮らしと住まい」、体験記募集「わたしの異文化体験」、二〇周年のときの「あなたからのメッセージ展」(写真コンテスト作品展、イラスト展)などのような事業が十分に展開できなかったのは残念です。市民参画の催しもできたら良かったと思います。ほかに、『音楽の現場—民博コレクションから』というDVDの頒布はしましたが、一般に市販するような開館三〇周年記念のあらたな出版物が発刊につながらなかったのも心残りな点でしょうか。

—全体的な感想としては?

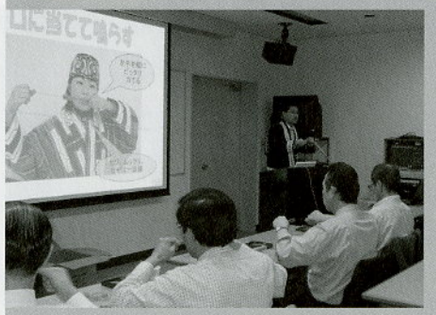
並行しておこなわれた『国立民族学博物館三十年史』の発刊や、『みんぱく実践人類学シリーズ』全八巻の刊行開始、日本文化人類学会との連携事業に関する協定書の締結、イントロダクション展示や、レストランの大規模改修、あるいは館内通路等の整備も、開館三〇周年という大きな節目をえてできたものだと思います。スローガン「地の先へ。知の奥へ。」も難産の末に決まりましたが、その過程でいろんな意見が出て、教職員の方々の民博に対する思いや愛着を引き出してもらうきっかけとなり、その意味でも良かったと思っています。また、すべての事業を教職員全員の協働で生み出したことが印象に残ります。

—この経験や記録をどう残していくのがいいでしょう。

個々の事業については、各担当課室で確実に記録や資料を保存しておき、アーカイブズ資料として総務課が取りまとめていきたいと考えています。写真類が散逸しないような対策も考えておく必要があります。

—五〇周年をめざしたアーカイブズ化も考えるべきでしょうね。ありがとうございました。

カウントダウン・イベント
2007年11月17日


公開フォーラム「日本における多文化教育—アイヌ文化の場合」でおこなわれた口琴作りワークショップ 2007年3月27日